

ウィーンの話

ウィーンには、ウィーンナールシー、ウィーンナールコーヒール、ウィーンナールシニツツェルといった、街の名前の付いたものが多々あるが、まずは音楽の話をした。

ウィーンが「音楽の都」と呼ばれていることに異を唱える人はいないだろう。作曲家のハイドンやシューベルト、ヨハン・シュトラウス親子が生まれ、モーツァルト、ベートーベン、ブラームスなどが音楽の



ウィーンの街並み

勉強、活躍の場を求めてこの街にやってきた。この街が音楽の都と呼ばれるようになったのは、どんな経緯があったのか想像

た。この街が音楽の都と呼ばれるようになったのは、どんな経緯があったのか想像

してみる。13世紀後半以降、オーストリアはハプスブルク家が支配していた。ラジオもテレビもない時代、貴族の娯楽

といえば、自分たちでお芝居をしたり、楽器を奏でるといったことだろう。そこから発展し、次第に音楽家を集めてコンサートを開催するようになったのかもしれない。ウィーン少年合唱団も、

前身は宮廷教会の聖歌隊だった。日本でも、茶の湯や能を好んだという豊臣秀吉に取り入るために、多くの大名がこぞって茶会や能を開催したらしいが、ウィーンでも同様に「〇〇家主催コンサート」と銘打って、貴族が仲間たちを集めてはコンサートを開いていたと思われる。ホスト役はこんな感じだろうか。「皆さま、ようこそ当家

を占めている場面を必ず見かける。「東京に行けば、いつでもどこでも芸者遊びができるか?」と問われれば「ノー!」であるが、「ウィーンに行けば、いつでもどこでもウィーンナールツが聴けるか?」と問われれば「イエス!」と答えることができるほど、この街ではウィーンナールツのコンサートが頻繁に開催されている。

た。この街が音楽の都と呼ばれるようになったのは、どんな経緯があったのか想像



国立歌劇場

日本人ドライバーガイド藤島のつぶやき



文・写真/藤島 淳一

めてさらに音楽家が集まる——そんな伝統が、おそらく現在まで続いているというわけである。

のコンサートにいらっしやいました。本日は非常に才能ある若き作曲家フランツ・シューベルト君をご紹介します。作曲家に自分のための作品を書いてもらい報酬を与える、もしくはオペラ歌手や演奏家、バレエダンサーのスポンサーとなる、といった具合に音楽家が活躍できる環境が整えられていた向きがあり、そのチャンス

やくシーンが記憶に残っている。

それから、ウィーンの音楽はなんといっても、ヨハン・シュトラウス親子の「ウィーンナールツ」に尽きるだろう。特に、毎年元日に楽友協会の黄金のホールで開催される、ウィーンフィルハーモニーのニューイヤークンサートが有名だが、このコンサートを生演奏で聴くことはワルツ好きにとっては垂れんのである。チケットは目が飛び出るほど高く、それでも「どうしても」という方もいるようで、テレビ中継には日本人の聴衆がホールの一角

を占めている場面を必ず見かける。「東京に行けば、いつでもどこでも芸者遊びができるか?」と問われれば「ノー!」であるが、「ウィーンに行けば、いつでもどこでもウィーンナールツが聴けるか?」と問われれば「イエス!」と答えることができるほど、この街ではウィーンナールツのコンサートが頻繁に開催されている。



ヨハン・シュトラウスの像

まに「演奏会を楽しもう」という和気あいあいとした雰囲気満ちて非常に楽しめる。最後にはアンコールとしておなじみの「美しく青きドナウ」が演奏されるが、観客はこの曲を「今か、今か」と固唾をのんで待ち望んでいる。曲が終われば大満足、そしてこれまたおなじみの、観客による手拍子付きの「ラデツキー行進曲」でコンサートはお開きになる。外に出るときれいな街の夜景が広がり、「楽しい演奏会だったねえ!」と思わせてくれるのもうれしい。

ラジオも

月～金 あさ 7:30～11:00

月～金 ひる 1:00～3:55

テレビも

ABS

金曜 夕方 3:50～5:00

ABS news every.

月～金 夕方 6:15～7:00 (木曜 夕方 6:15～6:55)

ABS秋田放送

http://www.akita-abs.co.jp/